

『広げよう歯科の目を』

“Broaden our outlook: broadening the outlook of dentistry”



日本歯科大学附属病院総合診療科 歯内療法チーム 北村和夫（大会長）

日本顕微鏡歯科学会が設立して10年が経過し、会員数も600人を超え、顕微鏡を使用している先生が年々増加している。ここ数年、首都圏を中心に歯科用顕微鏡の普及率が上昇し、今後さらなる伸びが見込まれている。

現在、技術の進歩に伴い多くの顕微鏡治療専用の器具が開発され、その診療体系が確立しつつある。顕微鏡を用いた歯科治療がマスコミで取り上げられる機会が増加し、顕微鏡歯科治療の認知度が上がっている。患者さんはインターネットを中心に様々な方法で情報を入手し、顕微鏡を用いた治療を希望する人が増加している。また、顕微鏡歯科医に患者さんを紹介くださる先生も増加し、顕微鏡を用いて精密に加療することで、いままで治らなかったものがすべて治癒するとお考えの患者さんも多くいる。しかしながら、顕微鏡を使用しないにかかわらず直すことの困難な症例がたくさんあるのも事実である。顕微鏡を始める前に、それを見極めるために必要な知識を学ぶことが不必要なトラブルを防止することにつながる。

講演では歯内療法の立場から症例写真を中心に、従来の偏心投影のデンタルX線写真やパノラマX線写真、歯科用CT、生検、病理切片から読み取れることを整理し、その活かし方をお話する予定である。大きな透過像を有するような症例では、歯を保存できるかどうかの見極めが大切であり、生検、病理切片の読影などを身に付ける必要がある。また、骨髄炎の典型的なパノラマX線写真を供覧いただき、根管治療すべきか否かの診断を早く下すことの重要性をお話する予定である。骨髄炎に気づかずに根管治療を続けることは患者さんに大きな負担を強いることになる。適切な治療方針を患者さんに伝えることで信頼が生まれ、適切ではない治療方針で治療を進めることで不信感が生まれる。何事も最初の診断が肝心である。

今回、「広げよう歯科の目を」をテーマに、顕微鏡だけに固執しすぎて視野が狭くならないよう、もう一度今までの知識を整理し、新しい知識を習得することにより、多角的に見る目を養い、明日からの顕微鏡を用いた歯科治療に生かしていただきたい。